





あ」	エピロー	第六稿	第五稿	第四稿	第三稿	第二稿	第一稿	プロロー
あとがき	- グ 彼女は変わらない	思い出は揺るぎない	決戦は負けられない	共同生活は話せない	勘違いは避けられない	瞬間移動は防げない	原稿は進まない	ーグ

244 225 196 153 128 86 50 10 6

プロローグ 結婚は祝えない

いつもより早く来月号の原稿を納品しなければならなかったことと、今週に限って音楽雑誌 とにかく息をつく暇もないほど忙しかった。

イラスト数点を依頼されていたからである。仕事がひと段落したのは、

つい先ほどのことだった。

度を整えたアシスタントの海老原が声をかけてきた。料棚から一冊の少年マンガ雑誌を取り出す。そのページをパラパラめくっているところへ、帰り支 熱いコーヒーを一口飲んで、僅かな苦みと仕事の達成感を同時に味わうと、仕事机の脇にある資

くて非常に気が利く好青年。プロデビューにかける情熱も含めて、昔の俺にそっくりだ。 「お疲れさまでした藤本先生。僕はお先にあがらせていただきますね」 一本の月刊連載をもっているマンガ家の俺にとって、海老原は唯一のアシスタントだ。

仕事も早

「またそれを読んでいるんですか? 苦笑を浮かべていると、海老原が傍まで歩み寄って手元を覗き込んできた。 四年前の『週刊少年ファイター』ですよね.

俺は決して好青年ってわけじゃなかったな

8

載陣のなかでもっとも人気のあるマンガ家、寺田寛人のデビュー作が掲載されているのだ。(彼が言うように、俺はよくこの号を読み返している。そこには現在の『週刊少年ファイター』 「それは何度も聞きましたよ。僕が言いたいのは、 「この号には俺の思い出が詰まってるからな。 特に今日みたいな日は読み返したくもなるさ のんびりしている時間があるんですかってこと

今晩七時からは、 ため息まじりで壁掛け時計に視線を向ける。 寺田寛人と交流の深いマンガ家や編集者たちが一堂に会する飲み会が予定され 針は午後六時半を回ったあたりを指していた。

しかし俺は仕事を片付けた今でも、その会場へ行くことを躊躇していた。ていた。寺田寛人の結婚が正式に決まったらしく、その報告を兼ねての前祝いである。

欠の連絡をほしいって言っていたことも。まさか連絡してないんですか?」 「どうしたんです藤本先生? 僕、今日の祝賀会のことはちゃんと伝えましたよね。 青月先生が出

ガ家の一人だ。 青月先生とは、 最近まったく会っていないが、やはり俺や寺田寛人と馴染みの深い同年代のマン

「もちろんちゃんと行くって連絡したぞ。でも今さらながら、 実は連絡などしていない。 行こうかどうか迷ってるんだ」

そんな俺の胸中を読み取ったのか、 海老原が怪訝な視線を向けてきた。

「どうして迷うんですか。もしかして寺田先生にお会いするのが久しぶりだから、 緊張されている

「ははは、それもあるかな」

表情を隠すためにも、熱いコーヒーを口もとに運ぶ。

あったんですよね?」 づらいとか? 「それもあるって……ほかにも緊張する要素があるんですか?」まさか寺田先生の婚約者にも会い 藤本先生は寺田先生だけじゃなくて、その婚約者さんともデビュー前から面

思わずコーヒーを喉に詰まらせて咳き込んだ。海老原の言葉が図星だったからだ。

「なんでお前がそんなことまで知ってるんだ?」

り驚きましたか?」 釘を刺されましてね。連絡したってことは、もう聞いたんでしょ? ですけど、寺田先生の婚約者についてはどうしても自分の口で言いたいから黙っていてほしいって 藤本先生とどんな関係だったのか、色々と聞いちゃいました。すぐ藤本先生にお伝えしたか 「青月先生から祝賀会のお電話を受けたのは僕なんですよ。そのときに寺田先生の婚約者が誰 相手の名前を聞いて、やっぱ ったん

連絡はしていないが、 寺田寛人の婚約者が誰なのかは知っている。 四年前のあの日から。

海老原はさらに続けた。

会に行きたくない、なんて言うんじゃないでしょうね?」 「もしかして、藤本先生は昔から寺田先生の婚約者のことが好きで、今も恋焦がれているから祝賀

今度こそコーヒーを吹き出してしまった。傍にあったティッシュでそれを拭う。

「……お前なぁ」

ちょうどそのとき、2DKの自宅兼仕事場に来客を報せるインターホンのチャイムが鳴り響

ひょっとして、それも図星なんですか?」

このタイミングでの来客って、ひよつユンで……」思っ海老原が俺を残して玄関へ向かう。

「藤本先生! このタイミングでの来客って、 青月先生がいらっしゃいましたよ!」 ひょっとして……と思っていると、

俺の憶測を裏付ける海老原の声が、玄関先から聞こえてきた。

わざ連れ出しに来たようだ。読みかけの『週間少年ファイター』を棚に戻して、ため息をつく。こ どうやら青月は俺が連絡を返さなかったことから、祝賀会を欠席するかもしれないと思ってわざ

かつての俺は海老原の言うとおり、寺田寛人の婚約者に恋をしていた。

うなった以上は、覚悟を決めて出席するしかなさそうだ。

たい、SFじみた不思議な体験をしたことがきっかけだ。 本当なら始まらなかったはずの恋。それでも始まってしまったのは、 当時 の俺がにわか に信 じが

ガ家になっていない頃……ちょうど今と同じ、 気まぐれな神様が引き起こした超常現象。そんな厄介なものに巻き込まれたのは、 うだるように暑い四年前の夏だった。 俺がまだマン

第一稿 原稿は進まない

七月中旬を過ぎた頃の東京は、灼熱地獄と化す

を落とせば、 トが流した汗は蒸発し、その上にいるだけで天然のサウナが楽しめる。マンホールの蓋の上に ヒートアイランド現象だかなんだか知らないが、 目玉焼きだって作れるかもしれない。 例年の平均気温は上昇する一方だ。アスファル

代の請求書を見るたびに、腰を抜かしそうになるからだ。 りスイッチを入れてしまわないように、リモコンから乾電池そのものを抜いている。 自室には一応クーラーがあるのだが、この夏こそはなるべく稼働させないつもりでいた。 毎年夏の電気 うっ か

難する。この暑さのなかでもじっとしていられるのは、街で合唱中の蝉くらいだろう。 地 面と空からの凶悪極まりない熱気の挟み撃ちで、多くの人間は冷房の効 いた近くの飲 食店 E 避

ある。ダストとはゴミみたいな名前だが、俺のようなマンガ家志望者からすれば最 一百五十円のソフトドリンク飲み放題を注文するだけで、クーラーの恩恵に与れるのだから。 そんなわけで、 俺はこうして近所のファミリーレストラン『ダスト』へ頻繁にやってくる 高 の天国だ。 ので

時 間 いても追 い出されることはない。店側 のサービス精神には頭が下がる。

なあ テーブルを挟んで俺の正面に座っている男は、 ||黒川 人間 0 優しさって無 限大だよな?」 友人の黒川輝行。 さっきからずっと携帯ゲー

「知らねーよ。そんなことより全然進んでないじゃん」

をいじってい

る。

そう言って俺の手元にある白紙のネームを顎で指し示す。

れていく。今日は冷房の効いたファミレスで、そのネームを作っていたのだ。 筆で記したマンガの設計図のことだ。これを担当編集者に見せてオーケーが出たら、 ネームとは、 コピー用紙などにマンガのコマ割りや登場人物 の立ち位置、 そしてセリフなどを鉛 原稿に墨

完成することすらない。 しかし俺は何度ネームを描き直しても、まったくオーケーがもらえないでいた。 なんのアイデアも思い浮かばないのだ。 近頃はネ

「黒川さぁ、なんかいいアイデアない? 担当さんをギャフンと言わせられるような

Ĺ, つも思っているんだけど、 お前のマンガには、 かわいい女の子が出てこないのが弱点なんだより

い放

つ黒川

携帯ゲーム機に視線を落としたまま、そっけなく言いわゆる『萌え』がないんだな」

には ゆる 黒川とは高 ほ 同 とんど 人誌 校時 無頓着で、 活動を続けている。 代 から 世 の腐れ縁。この男は既存のマンガ 間 般 それに無類 ではオタクと呼ばれる人種だった。 のアニメ、ゲーム、マンガ、 のパロディを描い 小説好き。その他のこと て販売するという、

黒川自身、それを誇りに思っている節がある。

「人間が生きていられる時間は限られてるんだ。それなら、 いかに多くのエンターテイメント作品

に触れられるかが勝負だろ?」

ということで、彼の部屋にはすさまじい数のマンガや小説、ゲームやアニメのDVDがところ狭

いるのは、彼の描く同人誌がそこそこ売れているからだ。 しと並べられていた。そのあまりの重量に、部屋そのものが少々沈んでいるらしい。 ちなみに黒川はバイト代の半分以上をそういった趣味に使っているのだが、それでも生活できて 知識量も豊富なので、こうしてたまに

二萌え』か……難しいな」

ネームのアイデア出しに協力してもらっていた。

「たとえば、このゲームに登場する青月美虎ちゃんみたいな子が『萌え』だ。ほら、この子

そう言って携帯ゲーム機の画面を見せてくる。 招き猫みたいなポーズをした青い猫耳姿の女の子が、画面いっぱいに映っていた。

異世界の女の

子と恋愛していくアドベンチャーゲームの登場人物らしい。

「かわいいだろ。名前もかわいい。俺もペンネームを青月美虎に変えようかな。 ククク……」

黒川は再び携帯ゲーム機に視線を落とすと、薄気味悪く笑った。

「……俺にはよくわからん」

の子自体に縁がない 「青月美虎ちゃんの良さがわからんとは哀れな奴だ。まあ、お前には二次元どころか、三次元の女 からな

チェック柄のシャツをケミカルウォッシュのジーンズに「イン」しており、プライベートではこれ もう一度言うが、黒川は自分の趣味以外には無頓着な男である。服装だってそうだ。いつも

以外の服を見たことがない。髪の毛も洗うのが面倒だという理由で坊主頭。そこにいつも無地 タオルを巻いてい の白

にはものすごくかわいい彼女がいるのである。 そんな男に「三次元の女の子と縁がない」と言われるのは非常に腹立たしいのだが、 驚天動地とはまさにこのことだ。 なんと黒川

その彼女こそ黒川が現在待ち合わせをしている相手で、 俺も黒川と三人でたまに会う。 関西 から

「テルちゃん、おまた」

流れてきた元雑誌モデルという話だが、本当だろうか。

そんなことを考えていると、当の本人がやってきた。

黒川の彼女で、同人誌の即売会で出会ったというスタイル抜群のコスプレクイーン、虹野ビオレッさらさらの長い黒髪に、ばっちり二重まぶた。瞬きをすれば風がそよぎそうなほど長いまつ毛。 タだ。本名は知らない。 ファミレス内の客やウェイトレスたちは、みんな口をあんぐりと開けて、腰をくねらせながら歩 さらさらの長い黒髪に、ぱっちり二重まぶた。瞬きをすれば風がそよぎそうなほど長 年齢も不詳。たまに黒川が描く同人誌のアシスタントもやってい 、るら

視線を独占している理由は、スタイル抜群の美女がスーパーモデルばりのキャットウォークで歩い くビオレッタに目を奪われている。 ビオレッタはコスプレクイーンの名にふさわしく、 普段から奇抜な格好をしている。今も店 内の

そっとしといてほ 「ごめんな、ちょっとカメラ小僧に追いかけられとってん。ほんま、人のプライベートくらいは

ているだけでなく、キラキラ光る青いチャイナドレスを着ているからである。

「それはビオレッタちゃんが、かわいすぎるからだよ」

「もう、ウチをおだてても、なんも出ぇへんで」

ビオレッタは怪しげな関西弁を放ちながら、黒川の隣に座った。俺のことなど眼中にないようで、

黒川とイチャイチャしながらこれから出かけるデートの打ち合わせを始めた。

はっきり言って、目の前に並んで座る男女はどう考えても釣り合いがとれてい ない。

「あのさビオレッタ、黒川のどこがいいの?」

そう尋ねると、ビオレッタはあまりにも想定外の質問をされた教師のように、 きょとんとした顔

で首を傾げた。人差し指を頬に当てる仕草もとても自然で洗練されている。

「え? そんなん全部やん。テルちゃんほどの男は関西でもそうおらんかったな」 黒川は自信たっぷりの面構えでアイスコーヒーをすすっている。「ほら、こんな渋いところと

浮気せんかどうか心配やわ!」

わないでほしい。 そんな黒川に彼女ができたことが驚きなのだ。決して俺が彼のことを嫌いで、けなしているとは思 けで、「どの作品の?」と聞き返してくるほど、現実の女の子とは縁がなかった男だ。だからこそ、 黒川ならその心配は皆無と言ってもいい。なにしろ高校時代は「女の子」という単語を聞

人なのだ。どうしても裏で別の男と付き合っているのでは、と邪推してしまう。 浮気の心配があるのはむしろビオレッタのほうである。多少の変わり者ではあるが、ここまで美

ある種のトラウマを植え付けられた。 たのは、今年の春先に起きた事件が原因である。そこで俺は女性と付き合うということに対して、 少々卑屈に聞こえるかもしれないが、俺が美人の女性に対してそんな考えを抱くきっか け になっ

つづきは書籍版でお楽しみ下さい。

電子立ち読み版

すれちがいが止まらない

2013年2月5日 立読版 発 行

著 者 菅 野 日 曜 日 発行者 青 木 治 道 発行所 株式会社 青 心 社

> 〒 550-0005 大阪市西区西本町 1-13-38 新 興 産 ビ ル 7 2 0 電話 06-6543-2718 FAX 06-6543-2719 振替 00930-7-21375 http://www.seishinsha-online.co.jp/

©Nichiyoubi Sugano 2013 All rights reserved.



